

菊地：エコ・ツーリズムの分析視角に向けて

エコ・ツーリズムの分析視角に向けて

—エコ・ツーリズムにおける「地域住民」と「自然」の検討を通して—

菊地 直樹

(姫路工業大学)

「エコ・ツーリズム (Eco-tourism)」⁽¹⁾ と地域住民の生活や文化との間には、その概念の生成過程から考えても密接に関係がある。実際、エコ・ツーリズムは「地域主体の観光」や「地域づくりにも結びつく」と評されてきたが、これまでの研究では、地域住民は「取り入れる」対象、「啓蒙」する対象とされ、地域社会の問題は「環境教育」や「住民参加」の問題とされている。そこでは、エコ・ツーリズムが導入される当該地域の生活の論理や文化、地域住民の主体性への視点に欠けている。それに対し本稿では、当該地域住民がエコ・ツーリズムという外部の枠組みを受けとめて自らの拠点から生活を組み立て、地域を再構築していく問題としてエコ・ツーリズムをとらえることを試みた。

地域住民の生活という観点からエコ・ツーリズムの可能性を模索するには、エコ・ツーリズム研究における「自然」が問い直されねばならないだろう。エコ・ツーリズムの対象となる自然は、「保護地域」といった学術的に序列づけられた自然が中心であったが、自然は地域社会の社会的・歴史的構成物であり、人間と自然とのかかわりの歴史、人間と人間の関係の歴史が内包されている。「内包された自然」が研究者等によって「無垢な自然」や「消費する自然」とされるのがエコ・ツーリズムであるし、逆にその過程で地域住民が自然を対象化し、地域を再評価するともいえる。

重要なのは、エコ・ツーリズムという社会関係のなかで、地域住民が、文化としての自然を「操作できる対象として新たに作り上げる」主体でありえるかどうかである。本稿では、高知県大方町の砂浜美術館の考え方と活動を事例として、この問題を考察した。

キーワード：エコ・ツーリズム、地域住民、自然、保護地域、砂浜美術館、地域の再構築

1. はじめに

1.1. エコ・ツーリズムをめぐって

エコ・ツーリズム。最近、日本でもよく聞かれるようになった言葉である。1990年代に入り、国内外の事例が盛んに報告され、ガイドラインも幾つか作成された。また、観光産業の印刷物やさまざまなメディアでも、エコ・ツーリズム、エコ・ツアーという言葉が使われるようになっていく⁽²⁾。エコ・ツーリズムは、「自然に親しむことを目的」「環境にやさしい」といった、従来までの観光とは異なった「新しさ」を示すさまざまなイメージが付与された「商品」として市場に流通しつつある⁽³⁾。

考えてみれば、エコ・ツーリズムに不可欠な構成要素である「自然」は、古くから重要な観光資源であり、近年になって観光対象となったわけではない⁽⁴⁾。では、どこにエコ・ツーリズムが従来までの自然鑑賞型観光と異なる点が求められ、なぜエコ・ツーリズムが提唱されてきたの

であろうか。

エコ・ツーリズムという概念の生成過程は十分に明らかにされていないが、自然保護のための経済手段を導入しようとする考え方—保護地域への観光が、さまざまな雇用機会を提供し、地方と国に双方に収入をもたらすことのできる選択肢のひとつであり、保護地域を保護する上で可能性をもった手法という見解—と自然志向の旅行者ニーズの増加に対応しようとする観光産業分野の要求が1980年代後半に結びついて発展してきたといわれている(Boo, 1991=1992:2; 水野, 1996: 54; 西村, 1998:38; 敷田, 1994:4)。エコ・ツーリズム概念が出現するまでの観光と自然環境に関する研究を検討した西村は、マス・ツーリズムが引き起こしてきた自然的・社会的・文化的悪影響への反省を踏まえ、自然資源を持続可能とすることを現実的に達成するための手段として考え出された観光形態がエコ・ツーリズムであるとしている(西村, 1998:37-40)。エコ・ツーリズムは「持続可能な開発(sustainable development)」のひとつとして位置づけられているのである。

1.2. 問題関心

エコ・ツーリズム概念の生成は、たとえ保護地域であっても人間の影響は及んでいるという自然保護における「自然観の変化」と保全への協力のために地域住民の生活安定が求められるという「地域住民の生活への着目」と密接にかかわっている(伊藤, 1997:17)。ゆえに、少なくとも他の観光よりは地域住民の生活が重視されているといえるだろう。エコ・ツーリズム研究は、これまでは、稀少生物や生態系の保護といった自然保護の視点や新しい観光商品とその持続的な利用という視点からおこなわれてきた。それらは、実践的で多方面から求められるが、多くはエコ・ツーリズムを観光という社会現象としてとらえる視点に欠け、結果としてエコ・ツーリズムにおける力関係(たとえば、ホスト—ゲスト関係)を「環境にやさしい観光」といったイメージのもとに捨棄してしまっている。そこでは、エコ・ツーリズムが導入される当該地域の生活の論理や文化への視点が抜け落ちてしまうのである。

それに対して本稿では、自然保護や持続可能な観光の問題というよりも、当該地域住民がエコ・ツーリズムという外部の枠組みを受けとめて自らの拠点から生活を組み立て、地域を再構築していくという問題としてとらえてみたい。それは、当該地域住民が地域を見直す装置(メディア)としてエコ・ツーリズムをとらえることでもある⁽⁵⁾。

以上の問題関心に基づき、主に日本におけるエコ・ツーリズムの研究動向を紹介・検討することを通して、研究および実践・開発過程において、どのような視点から対象としての自然がとらえられ、地域や地域住民がどのように想定されているかを検討する。主な課題は、エコ・ツーリズムが導入される当該地域にとって外部の論理として作用するエコ・ツーリズムを、生活現場からとらえ直す視点を模索することである。それは、エコ・ツーリズムの可能性や持続可能な観光開発を問い直すことにもつながるだろう。

菊地：エコ・ツーリズムの分析視角に向けて

2. エコ・ツーリズムの定義と研究動向

2.1. エコ・ツーリズムの定義

エコ・ツーリズムはどのように定義されているのだろうか。主な定義を紹介したい。

自然保護を強調したものから紹介しよう。ブー (Boo) は、「エコ・ツーリズムとは、(1) 保護地域のための資金を生み出し、(2) 地域社会の雇用機会を創出し、(3) 環境教育を提供することによって、自然保護に貢献するような自然志向型の観光 (ツーリズム)」 (Boo, 1991=1992:2) と定義している。(財) 自然保護協会は、「旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境教育が提供され、地域の自然と文化の保護・地域経済に貢献することを目的とした旅行形態」 (日本自然保護協会, 1994:5) と定義している。社団法人日本旅行業協会は、「エコツーリズムは、自然観察を中心としてその土地に存在する生態系 (エコロジー) を守り、そのインパクト (悪影響) を最小限にしようとするツアーを実践する運動である。さらに、その生態系の中に生きる住民の生活も含んでいることから、先住民に対する『観光による自立』を支援する活動も重要な要素」 (日本旅行業協会, 1998:16) と定義し、米国旅行業協会は、「エコツーリズムは、環境との調和を重視した旅行、即ち野生の自然そのものや環境を破壊せずに自然や文化を楽しむことを目的」 (国際観光振興会, 1992:5) と定義している。

このようにエコ・ツーリズムの定義は多様であり、さまざまな意味が付与されている。自然保護を強調した定義では、保護地域 (自然地域)、地域経済、環境教育が共通するキーワードであり、エコ・ツーリズムは保護地域を保護するための経済的手段、教育的手段と位置づけられている。観光からの定義では、「観光 (ツーリズム) が環境問題に対してどのような役割を果たするか」 (国際観光振興会, 1992) との認識をもとに、観光資源の持続可能な利用を目的に含んでいる。大意として「環境にやさしい観光」といえよう。いずれにしても、自然保護の手段としてのニュアンスが強く、自然へのインパクトが議論すべき重要な問題とされている。当該地域に関しては、「貢献」「支援」する対象ととらえられており、その主体性への関心はほとんどみられない。

エコ・ツーリズムを社会現象としてとらえる本稿では、エコ・ツーリズムにさまざまな意味を付与することは控えたい。したがって以下のように操作的に定義する。「エコ・ツーリズムとは、環境問題が重要な社会問題と認識される現代社会において、自然を中心とした環境を主な対象とし、自然保護、環境問題への志向性をもった観光が生み出した諸々の社会現象」と。

2.2. エコ・ツーリズム研究の動向

エコ・ツーリズムに関する本格的な研究は、まだ始まったばかりだが、さまざまな学問的、実践的関心から、包括的でさまざまな領域にかかわる研究がおこなわれている。ゆえに、研究動向を分類することは困難であるが、あえて概観してみよう。

第一に、エコ・ツーリズムの基本的な考え方を提示する研究がある。伊藤 (1992) や Boo (1991=1992) はエコ・ツーリズムの基本的な考え方を提示し、敷田 (1994)、海津・真板

(1995) 水野 (1996) は、日本におけるエコ・ツーリズムの可能性と問題点を指摘している。西村 (1998) はエコ・ツーリズムの概念の成立過程を詳細に論じ持続可能な観光を模索しており、伊藤 (1997) は人間を中心にしてエコ・ツーリズムの問題を多方面から検討している。

第二に、エコ・ツーリズムの実現の可能性、方策、方法、条件を検討した研究がある。海津・真板 (1995)、伊藤 (1997)、西村 (1998) は計画と住民参加の必要性を指摘し、海津・橋本・真板 (1997) は資源管理システムを検討している。真板・海津 (1996)、日本旅行業協会 (1998) は新しい観光商品としての可能性に関して、Boo (1991=1992)、伊藤 (1992)、佐藤 (1993)、日本自然保護協会 (1994) は自然保護の手段としての有効性について検討している。

第三に、エコ・ツーリズムを社会現象、文化現象としてとらえる研究がある。真板・宮川・内藤・海津 (1998) はアンケートからエコ・ツーリストのマーケティング特性を明らかにしている。エコ・ツーリズムの権力性を指摘し、文化生産の場やアイデンティティの政治学の場としてとらえる観光人類学的研究には、池田 (1996a, 1996b)、太田 (1996)、江口 (1998)、橋本 (1999) がある。

2.3. エコ・ツーリズム研究における地域住民

従来、観光現象はホストとゲストとのかかわりにおいてとらえられてきた (Smith, ed, 1989=1991)。けれども、さまざまな専門家が関与し、対象地や資源は国家や行政によって管理されることが多いエコ・ツーリズムを二者関係でとらえるだけでは十分ではない。自らの生活を組み立てていく「地域住民」、地域アイデンティティを表明するメディアとする「地方自治体」と各種の自然とのふれあい事業やふるさと関連事業を展開する中央省庁という「行政」、自然の価値を重視し評価する「研究者 (および自然環境主義者)」、自らが失ってしまった自然を見出そうとするエコ・ツーリストといった「観光客」、新しい観光商品として自然を売り出そうとする「旅行業界」の五者を主体として想定しよう⁽⁶⁾。本稿では、主に研究者と地域住民に注目し、その間にある自然や地域へのパースペクティブのズレに注目したい。

多くのエコ・ツーリズム研究において、地域住民は主体として位置づけられており、地域の生活や文化、論理への関心は他の観光よりも大きいといえる。だが、多くの場合「保護地域あるいはその周辺に住み、時には宿泊施設や売店の経営者や従業員やツアーガイド、あるいは保護地域管理官としてツーリストのサービスを提供する地域住民」(伊藤, 1997:16) というように、地域経済や雇用の効果に関心が限られている。もちろん、「地元住民の意志があって初めてスタートする」(真板・海津, 1995:4)、「地元にとっては村づくりにもつながる」(山極, 1996:204) 等と、地域住民の意志やアイデンティティに踏み込んだ指摘もみられる。計画策定や実践過程に際して市民参加の必要性も論じられ (真板・海津, 1995:4; 伊藤, 1997:22; 西村, 1998:52)、地域振興や内発的発展の選択肢としてとらえることが提起されている (敷田, 1994:12)。

「観光地として整備された場所でない地域に観光を持ち込む業」(海津・橋本・真板, 1997:55) であるエコ・ツーリズムは、当該地域にとって、基本的には外部の論理である。したがって、地域住民は「取り込む」「組み入れる」対象であり、また外部からの研究者や自然保護団体が良心のもと、エコ・ツーリズムの考え方を「啓蒙」「啓発」する対象と位置づけられる。当該

菊地：エコ・ツーリズムの分析視角に向けて

地域の問題は「環境教育」や「住民参加」の問題として扱われるのである（伊藤，1997；西村，1998）。そこでは当該地域住民の「生活と生存の实在から学び、住民自身による主体的な判断力に待つという姿勢」（嘉田，1998:120）はほとんどみられないのである。

エコ・ツーリズムの社会性に注目し、文化生産の場やアイデンティティの政治学の場としてとらえる観光人類学的研究では、たとえばエコ・ツーリストと地元の人びととの間にあるギャップに注目した研究が行なわれ（橋本，1999）、自然ではなく住民の主体性や創造性に力点が向けられている。けれども、エコ・ツーリズムに言及した観光人類学的研究にしても、どちらかというところエコ・ツーリストや研究者、自然環境主義者の文化生産により焦点が当てられている（江口，1998；池田，1996b；太田，1996）⁽⁷⁾。

このようにエコ・ツーリズム研究において、地域の生活の論理や文化、地域住民の主体性は、一部の観光人類学研究を除いては見落とされたままである。したがって、全く行われていない環境社会学や観光社会学といった社会的視点からの研究がもめられよう。では、なぜ地域や地域住民は見落とされてしまうのだろうか。エコ・ツーリズム研究における「自然」を問い直すことから、この問題を検討してみよう。

3. エコ・ツーリズムにおける「自然」とその再定位

3.1. エコ・ツーリズム研究における「自然」の位置

エコ・ツーリズムを構成する重要な要素である「自然」は、「国立公園などの保護地域あるいは同等の自然及び文化資源のある地域」（伊藤，1997:16）、「どこにでもある自然環境ではなく希少性ゆえ貴重とされる場所」（西村，1998:46）、「保護され、荒らされていない自然資源や文化資源を持つ地域」（海津・橋本・真板，1997:57）、「手つかずに近い自然」（敷田，1994:6）といった言説から明らかなように、「単なる自然地」ではなく「保護地域」などのそれと位置づけられている。

自然は、研究者（主に生態学や生物学）によって調査研究され、その成果が自然保護の体系や観光商品の中に活かされることが求められる（伊藤，1992:12；敷田，1994:6）。「資源の価値付を研究者が行い、それを地域住民が受けとめて」（海津・橋本・真板，1997:57）というように、研究者は自然を再発見し、資源として評価する主体として重要な位置をしめている。自然は、自然生態学といった科学的知識によって、保護地域というように他の自然と差異化される。そして「無垢の自然」として「消費される自然」という「商品」になるのである。

3.2. 創られた「自然」

「保護地域」「自然地域」「国立公園」等の思想的背景には、「原生自然」という自然の本質的価値の観念を指摘できるが（鬼頭，1996:103-104）、そもそも、「原生自然」や「貴重な自然」「自然との共生」というエコ・ツーリズム対象地にともなうイメージは、当該地域に生活し生業を立てて暮らしている人たちではなく、都会人が都市にないものを求めて創るものである。自らの理想とする想像上の自然を現在に読み込んで、固定してしまう視線のあり方は、エコ・

ツーリズム研究にしばしばみられる。「創られた伝統」という議論にもかかわるが、原生自然という「真正性 (authenticity)」は、客観的だと見られる学問的見地から提出されたとしても、歴史的・地域的に形成されたものであり、諸主体間の相互交渉の中で生じる近代的概念としてとらえる視点が求められるだろう⁽⁸⁾。「自然自体がさまざまな人間の手によって改変されている限り、『原生自然』はひとつの理念型にすぎ」(関, 1996:463) ないのである。このような原生自然概念は、アメリカの国立公園や保護区が人間と自然との多様なかかわりあい方を断った上で成立してきたことからわかるように、多くの場合地域住民を排除し、科学的管理へと一元化してしまう。

そうした一元化された自然へのかかわり方に対する違和感が表明されている。たとえば中島成久は、「なんの取り得もない小さな過疎の島であった」屋久島が、現在では、「世界的にも貴重な自然がある島、生命あふれる環境の島」になったことに大きな落差を感じ、屋久島の自然が過去たどってきた開発の歴史や屋久島の人間の生活をも消去してしまう「自然の宝庫屋久島」という言説に疑いをかけている。「屋久島全体が一つの意味空間」であるのに、「奥岳域のみを切り離して保全するというのは、屋久島の伝統的な世界観からは信じられない意味空間の分割」(中島, 1998:206) なのである。白神山地の保護管理問題を論じた鬼頭秀一も、MAB (Man and Biosphere) 計画に一定の評価を与えながらも、人間と自然とのかかわりあいのあり方の多様性に欠けていると指摘している(鬼頭, 1996:234)。

3.3. 「自然」の再定位

エコ・ツーリズムが自然保護における自然観の変化と地域住民の生活への着目と密接にかかわる点は、自然保護としても観光開発としても画期的である。けれども、力点を地域住民の生活でなく自然に置くならば、「自然環境主義」(鳥越, 1997:19) の価値観に立脚したエコ・ツーリズム論といえよう。そこでは、人間と自然のかかわり方を地域から切り離れた上で、両者のあるべき関係を考えている。自然は資源の持続的利用という観点から、国立公園や保護地域というように国家や行政によって「公的」に管理される。その一方で、当該地域住民による「共的」な所有や利用、管理のあり方や生活の論理についての関心や配慮はほとんどみられない。けれども、地域住民の自然へのかかわりのあり方や共的な自然管理と利用は、自然を持続的に資源として利用するという点からも、社会的公正という点からも注目されている⁽⁹⁾。ゆえにエコ・ツーリズムが持続可能であるために問われなければならないのは、当該地域の人びとが日常的な実践のなかで、自然や生物とどのようにかかわり、どのような認識をもち、どのような社会関係のもとに生活や生業を営んでいるか、なのである⁽¹⁰⁾。

そもそも、自然は人間の社会的・歴史的な脈から切り離されるものではない。自然を地域社会にとって外部的な存在とする見方や、観念的に規定する方法に批判を加え、社会的存在として理解することがもとめられよう。自然は社会的存在であるとともに、社会も自然の内部で構成されている(丸山, 1997:150)。自然は、その自然を現在の姿に改変し、維持してきた人間社会の、とりわけ地域 (community) レベルでの生活や生業、文化との相互連関のうちにとらえられうる(関, 1996:463)。すなわち、自然は地域社会の社会的・歴史的な構成物であり、「人間と自然

菊地：エコ・ツーリズムの分析視角に向けて

とのかかわりの歴史、人間と人間の関係の歴史」が「内包された自然」（宮内, 1999:39）ととらえられるものである。

このように考えると、エコ・ツーリズムの対象となる自然は、学術的に序列づけられたものや、「地域の中にいくつかの限られた美しい景観や自然、大事な文化財や記念物がある」との考えから導き出されるものだけではない。「地域の中にあるすべての素材に価値」があるとの考えから把握されるものでもある（吉兼, 1998:139）。けれどもエコ・ツーリズムの対象とされる自然は、「内包された自然」そのものではありえない。エコ・ツーリズムという観光の力関係の中で「無垢の自然」や「消費される自然」とともに顕現するものとしてとらえる。「内包された自然」が研究者等によって「無垢な自然」や「消費する自然」とされるのがエコ・ツーリズムであるし、逆にそのことで地域住民が自然を対象化するともいえる。重要なのは、エコ・ツーリズムという社会関係のなかで、地域住民が文化としての自然を「操作できる対象として新たに作り上げる」（太田, 1993:391）主体でありえるかどうかなのである⁽¹¹⁾。

4. エコ・ツーリズムと地域の再構築：砂浜美術館の事例より

4.1. エコ・ツーリズムへの視点

エコ・ツーリズムは観光の一形態であり、基本的には不均衡な力関係（ホスト—ゲスト、地方—中央といった）から成り立っている。けれども、ここではエコ・ツーリズムにおける力関係を固定しその問題を糾弾したいのではない。近年の観光人類学や人文地理学、民俗学の諸研究は、観光における外部の論理は当該地域に一方的に押し付けられるのではなく、ホスト住民がそれを積極的に取り込んで、巧みに自己表象や地域アイデンティティの創出、地域活性化に役立てるように加工する過程に注目している（太田, 1993; 山下編, 1996; 川森, 1996; 福田, 1996; 森田, 1997; 山下, 1998）。当該地域や地域住民へは、「万人の共有財産」「インタープリター」というイメージがともなうように、エコ・ツーリズムは外部の論理として作用する一方で、同時に「内部の論理（たとえば内包された自然）」を外部社会に理解可能な形に加工して、「貴重な／価値ある」自然というもうひとつの「公共性」として提示する媒体ともなりうる。

本稿では、エコ・ツーリズムにおける力関係を前提としながらも、当該地域の住民がエコ・ツーリズムという装置（メディア）を用い、外部からの枠組（たとえば、自然保護、環境問題）や表象（原生自然等）を受け入れながら、それを加工し、いかにして自らの生活を組み立て、地域を再構築していくのかという問題を考察したい。それは、エコ・ツーリズムを地域、地域文化、環境文化がさまざまな関係の中で意識化され、創られていく媒体および過程としてとらえることでもある。高知県おおがたちょう大方町の砂浜美術館の実践から、この問題について考察してみたい⁽¹²⁾。

4.2. 「考え方」としての砂浜美術館

高知市から西へ103kmの高知県西南部に位置し、西に四万十川で有名な中村市、東に鰯の一本釣りで有名な佐賀町に挟まれた高知県大方町は、年平均気温約17℃と温暖である。人口は1996年10月現在で10,801人、わずかずつであるが減少している。その大方町に1989年夏に開館（開館式

は1990年4月1日)した「砂浜美術館」は、4kmにわたる「入野の浜」に365日、24時間オープンしていることになっている。けれども、入野の浜には美術館らしい建物はどこにも建っていない。

私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。ものの見方を変えると、いろいろな発想がわいてくる。四キロメートルの砂浜を頭の中で「美術館」にすることで、新しい創造力がわいてくる。砂浜が美術館だとすると……

砂浜美術館とは、砂浜、松原、らっきょう畑、海とが織りなす風景そのものを美術館と名づけ、そのことに「意義」と「主体性」を見出すことによって新しい価値観を創造しようとする「考え方」なのである。「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です」というコンセプトは、ものの見方が変わることでいろいろな発想や新しい創造力がわいてくる考え方として、人間が生きていくために大切なことをみつける哲学として位置づけられている(砂浜美術館, 1997:16)。

4.3. 手段としての Sea Side Gallery と主体としての「^{さみっとれん}砂美人連」

自然の中に作品を見つけるという砂浜美術館という考え方は、考え方だけではなかなか伝わらない。砂浜美術館の考え方を広く具体的に伝える手段が、砂浜美術館の特別展示作品と位置づけられる各種のイベント、Sea Side Gallery である。「Tシャツアート展」「砂の彫刻展(1994年に中止)」「漂流物展」「松原再生」「らっきょうの花見」「ホエールウォッチング」「シーサイドはだしマラソン」「エコ・ツアー」などがある。幾つか紹介しよう。漂流物展。「私たちは環境問題にももちろん関心を持っていますが、『ゴミを砂浜に捨てないようにしましょう』という説教じみた『看板』を出すようなことはあまりやりません。『漂流物』を単なる『ゴミ』といった無機質で味気ない物としてとらえるのではなく、もっと多角的に、そして時には『漂流物』にスピーチをさせながら『人間と自然にとって大切なこと』を考えていくのが砂浜美術館の『漂流物展』と考えます」(砂美人連, 1992)。ヤシの実、缶、ビンといったさまざまな漂流物を展示する漂流物展では、たとえば外国生活用品に「私たちが何気なく流したものがこうしてどこか遠い島の美しい砂浜を、醜く汚している可能性があります」といったメッセージをつけたりしている。

エコ・ツアー。大方町で1994年に開催された国際ホエールウォッチング会議などで、主に海外の研究者などからエコ・ツーリズムの理念の導入の必要性が指摘されてきたが(国際ホエールウォッチング会議実行委員会, 1995:41)、1995年4月にホエールウォッチングや砂浜美術館構想にその理念の導入を試みる「エコツーリズム研究会」が組織された。身近な自然、文化、歴史を再発見する観察会や学習会、ホエールウォッチングや四万十川での生態系の学習、天日の塩づくり体験など小人数のツアーが実施されている。

砂浜美術館の構想を推進するための「核となる民間組織」として位置づけられているのが「砂美人連」である。現在40名程が加入しており、メンバーの職業は、農業、自営業、団体職員、公務員等とさまざまであるが、大方町職員が多くを占めている。大方町で生まれ、育ち、働いてい

菊地：エコ・ツーリズムの分析視角に向けて

る人が多いが、町外のメンバーもいれば、移り住んで砂浜美術館に共鳴して入った人もいる。男性が圧倒的に多く、女性のメンバーはほとんどいない。

4.4. 砂浜美術館のまなざし

イベントをするだけなら、何も砂浜を美術館と見立てるコンセプトにまで高める必要はないだろう。砂浜を美術館と見立てることは、「人と自然の付き合い方」を考えるなかから自分たちの住む町、大方町で生きること、私たちのまちだからこそできること＝ナンバーワンよりオンリーワン（松本、1991=1994）を発見するための手法なのである。たとえば、開館式をする際、館長がいないとなると「鯨を『漁の対象』としなかった大方町では鯨はジャマ者だった。それを見るもの（作品）と考えることで鯨は一躍人気者となった」と地域の歴史が述べられる⁽¹³⁾。けれども、砂浜美術館は大方町で歴史的・社会的に培われてきた自然とのかかわり方そのものを再現しているわけではない。砂浜美術館は、「自然豊かな地方」というイメージが中央から創造されることによってメッセージとして作用するという意味で、歴史的な中央—地方関係に規定されている。けれども、そうしたイメージや関係を流用し巧みに逆転させ、自らの生活を組み立て直す実践ともいえる。大方町の自然、文化、歴史が体系的につなげられ、意味付けられる過程およびその結果が砂浜美術館であるが、それは砂美人連を中心とした大方町の人びとが、外部との関係性のなかで「操作できる対象」として創り上げてきたものなのである⁽¹⁴⁾。そこでの自然は、「内包された自然」や「消費される自然」と一義的に規定されるものではなく、両者の間に便宜的に位置づけられるものである⁽¹⁵⁾。

当該地域住民の主体性が前面に出ている砂浜美術館でも、外部の人（コンサルタントやデザイナー、写真家）たちとの出会いが砂浜美術館という考え方を生まれさせたし、その後もさまざまな専門家を取り込み、外部のまなざしを積極的に取り入れている。特に注目したいのは、砂美人連の人たちの多くは、大方町に生まれ、高校を卒業した後、地元就職した点で「定住民」といえるが、大方町で住むこと、生活することを主体的に選択した点で「選択的土着民」と自ら名乗っていることである。つまり、「よそ者」と「地元」、「漂泊」と「定住」という関係性の中に、自らを常に位置づけし直す視点から地域をとらえ直しているのである。大方町という「地域的」な視点と、人と自然の付き合い方、環境問題といったより「普遍的」な視点との往復作業がある。したがって砂浜美術館は、外部に理解不可能ではなく、理解可能なメッセージとして提示され⁽¹⁶⁾、そして外部からの賛同者を新たに得たり、専門家から知識、情報、技術を導入するメディアともなりうるのである。たとえば漂流物展は、黒潮が流れている大方町だからこそできるものであるが、そこに環境問題という意味が付与されている。

砂浜美術館の実践は、日常的で意識しない、言葉にすることが難しい地域の自然や文化や歴史を、「人と自然の付き合い方」といった外部社会に理解可能な論理に変換し、提示することによって、自ら住む地域をとらえ直し、大方町を自分たちにとって「生きる価値のある場」（池田、1996:88）としている。砂浜を美術館に見立てることは、置き換えたり取り替えたりすることができない、自らの住む町「らしさ」を創造するための手法なのである。「人間と自然の共生」のみならず、「人間と人間」のかかわりであり、大方町で生きることこそ、「人と自然の付き合い

方」という砂浜美術館の哲学であり、実践なのである⁽¹⁷⁾。

5. おわりに

これまでのエコ・ツーリズム研究において、当該地域住民にとってエコ・ツーリズムが外部の枠組みとして働くことに関心をあまりよせず、自然保護の手法としての可能性や持続可能な観光としての可能性が論じられてきた。それに対して、本稿は、当該地域住民がエコ・ツーリズムという外部の枠組みを受けとめて自らの拠点から生活を組み立て、地域を再構築していくという問題を検討してきた。

砂浜美術館が展開する大方町の自然は「原生自然」ではないし、とくに著名な文化財や記念物があるわけでもない。国家や行政によって保護区が設定されているわけでもない。砂浜美術館の実践は、「本物ではない」と否定的に評価されるものかもしれない。エコ・ツーリズムを通して他者を表象する方法は、研究者や自然環境主義者といった人たちが中心であった。けれども資源を提供する側と位置づけられていた人びとが、逆に自己を表象するためにエコ・ツーリズムを利用している。エコ・ツーリズムに取り込まれているというよりも、エコ・ツーリズムを取り込んでいるのである。その実践は、日本でのエコ・ツーリズムの展開における地域の主体性や地域文化の創造、地域の持続的な発展といった重要な論点を提供している⁽¹⁸⁾。

エコ・ツーリズムは新しい自然保護の手段として、特にその経済的手段として注目されているが、実際に自然を保護するというよりも、むしろ自然や環境への意識を創り出す媒体ととらえる。エコ・ツーリズムによって、当該地域の自然を保護したり、自然とのかかわり方や文化が復活、再現するというより、自分たちの住む地域や自然への自意識が形成されるのである。当該地域住民が、外部から形成される自然というイメージを媒介にして構造的に埋め込まれた場を「生きる価値のある場」に変換する。それは、エコ・ツーリズムによって地域が再構築されるということでもある(野田, 1997; 菊地, 1997)。エコ・ツーリズム対象地は、主に研究者や自然環境主義者などによって固定的な実体として本質化されてしまいがちであるが、むしろエコ・ツーリズムを軸とした新たな地域性が創出されるダイナミズムに目を向けるべきであろう。そのダイナミズムは、当該地域住民の自律性や主体性の回復というよりも、エコ・ツーリズムという観光の力関係を甘受しながらも自律性を積み上げていくという二律背反的過程としてとらえられるものである(菊地, 1997:267)。

その際重要になってくるのが、「よそ者」的視点である(鬼頭, 1996, 1998)。エコ・ツーリズムのばあい、自然を資源として価値づける「研究者」の役割が重要であり、西表島や屋久島では、担い手の多くはよそ者であるし⁽¹⁹⁾、エコ・ツーリストはまさによそ者である。中央からの研究者や自然保護団体をはじめとしたよそ者は、そこに住み生活している人に権力を持った強者として立ち現れてくるのが往々にしてみられる。けれども研究者といった専門家は多面的に問題にかかわっており、「住民/専門家」という図式自体乗り越えられるべきであろう(野田, 1996)。エコ・ツーリズムを論じるばあい、「よそ者」がもたらす普遍的な視点と「地元」の地域的、生活的視点とのパースペクティブのズレとその相互変容という問題は、きわめて重要であ

菊地：エコ・ツーリズムの分析視角に向けて

るし、さらに砂浜美術館の事例でみたように、「よそ者／地元」関係は固定的ではなく、可变的にとらえることがもとめられよう⁽²⁰⁾。

エコ・ツーリズムが導入される地域において、たとえば資源の発掘というような問題が議論され、調査され、ある場合には紛争化するなかで、地域がとらえ直され、「地域像」そのものが変容し、再構築されていく。重要なのは、「よそ者」的視点と「地元」的視点の往復作業からの「地域の固有性、すなわち歴史・文化・風土の再解釈」（野田, 1997）であり、それは「環境文化」（吉兼, 1996）の創造へとつながっていくかもしれない。

注

- (1) 本稿では、引用を除いて、エコツーリズムではなくエコ・ツーリズムと表記する。それは、エコ・ツーリズムをツーリズムにエコロジーが付け加えられたものととらえるからであり、歴史性と社会性を帯びた観光の一形態としてとらえるからでもある。
- (2) 筆者が知っている限り、1990年以前にはエコ・ツーリズム関連の日本語の論文・文献は発表されていないようである。1990年から『国立公園』誌上でエコ・ツーリズムの概念や事例が紹介され始め、1994年から日本旅行業協会の機関紙『JATA NEWS LETTER』でもエコ・ツーリズムに関する連載記事が始まった。1995年以降、エコ・ツーリズムを扱った論文、報告書、文献、ガイドブックが急速に増えてきている。
- (3) 屋久島や白神山地、西表島といった幾つかの地域でエコ・ツーリズムの実践に向けた動きが具体化している（市川, 1995; 滑志田, 1995; 海津・橋本・真板, 1997）。1998年3月には、エコツーリズム推進協議会が発足した。沖縄県で開催された設立記念シンポジウムには、筆者も含め約400名が参加し、国内外の事例発表を中心に、エコ・ツーリズムの現状と課題が議論された（エコツーリズム推進協議会編, 1998）。
- (4) 日本交通公社調査部（1994）によると、観光資源は自然資源と人文資源に大別され、観光資源の評価基準として、特A級、A級、B級、C級の四ランクが用いられている。エコ・ツーリズムの主要な対象地となる国立公園や特別天然記念物は、自然資源の特A級、A級に位置づけられている（日本交通公社調査部, 1994:37-42）。
- (5) エコ・ツーリズムをめぐる外部の論理と当該地域の論理の間にある「外部の目がある地区を公園にしようとしたときに、内部の目はその地区を庭にする」（鳥越, 1997:201）という微妙な差にこそ、住民の主体性を認めることでもある。
- (6) 江口（1998）や海津・橋本・真板（1997）を参考にした。
- (7) ここでは、エコ・ツーリズムを対象とした観光人類学的研究に限定してこのように述べたが、近年の人類学的研究で生活者の主体的、創造的な流用に焦点が当てられていることを否定しているわけではない。
- (8) 観光資源としての国立公園の成立過程を検討した荒山正彦は、「これまで所与の実体であると考えられてきた純粋な文化や文化のオーセンティシティは、実は研究者（記述者）が描きあげたフィクションに過ぎなかった…純粋な文化とは一見相反するかのようにおもわれる観光現象が、文化のオーセンティシティを生産し維持するシステムである」としている（荒山, 1995:795-796）。
- (9) たとえば熊本一規は、持続可能な開発の三条件として、(1) 自然と地域住民の生活とのかかわり、(2) 地域資源に対する地域住民の主権・確立、(3) 地域資源に対する地域住民の集団的権利、を指摘している（熊本, 1995:88-90）。このような議論は、近年コモンズ論として注目されている。
- (10) この点に関して、「最後の秘境」とのイメージが付与された西表島のばあい示唆に富んでいる。「イ

リオモテヤマネコ」をめぐって、「ヤマネコを保護するために島民は移住するべきだ」というあまりにも住民生活を無視する勧告（ライハウゼン勧告）が提唱されたこともあり、「ヤマネコか人間か」と保護派と開発派との対立が深刻化した時期があった（1975年-1983年頃）。ここでは、主に研究者や本土から移り住んできた「よそ者」が「普遍的・科学的」とされる見地から保護を主張し、島に生活が根づいている住民が「生活」の論理から開発を主張するという現象がみられた（日米民間環境会議・日本側組織合同委員会, 1981:39-53）。その後、九州大学や琉球大学の研究者による調査によって、保護を優先するあまり、農業を止めてしまえば、ヤマネコの餌もなくなり、保護につながらないことがわかり、「ヤマネコも人間も」と両立を探る発展を模索するようになった。こうした経緯をふまえ、環境庁のエコ・ツーリズムのモデル地域に選定され、島民との協力による資源調査がおこなわれた。この調査を通して、島民ですら知らなかった資源が抽出されたりして、島の価値に対する再認識が始まっているという。20年間にわたる自然保護と生活との調和をさぐる方法として到達したのが、エコ・ツーリズムであったという（真板・海津, 1995, 1996; 海津・橋本・真板, 1997）。

- (11) ただし、地域住民の意識的、主体的な実践に限定するならば、「『非一貫性』や『雑種性』をはぐくんでいる『生活の場』を捉えそこなって」（小田, 1996:848）しまうという問題があるだろう。
- (12) 紙面の関係から、砂浜美術館の実践そのものを詳しく論じることはできない。砂浜美術館（1997）菊地（1998; 1999a; 1999b）を参照されたい。
- (13) 砂浜美術館の作品にあげられるホエールウォッチングは1989年から始められ、1994年には国際会議が開催されるなど、ニタリクジラが定住する数少ないポイントとして、日本のみならず海外からも注目されている。ホエールウォッチングと砂浜美術館の活動は、同じ1989年に始まっているが、両者は有機的に結びついているとはいえないし、「鯨を邪魔もの」としてとらえる漁師もいるだろう。ただ、大方町民は、ホエールウォッチングを通して、クジラの価値を「観光資源」のみならず、「海の豊かさを示す生物」「自然を理解するのに役立つ生物」「自然を構成する上でいなくてはならない生物」というように生態系重視の意識と結びつけて評価している（水野, 1997）。つまり、ホエールウォッチングは自然の豊かさや環境問題と結びつけてとらえられている。
- (14) たとえば、砂浜美術館の考え方では、大方町の生活や文化は、以下のようにとらえ直される。「僕は毎日の生活そのものが文化なんじゃないかと考えています。コンサートを開く文化ホールがない。美術館がない。博物館がない。そういうことであなたの町の文化度が低いといわれても困る。大方町には東京ドームはありませんが、逆にいえば東京には四キロメートルの砂浜はありません。十万本の松原を東京に作るとしたら一体いくら必要ですか。ましてやニタリクジラを東京湾に定住させるとしたら、国家予算でもむずかしいんじゃないかと思えますね」（畦地和也氏）。砂浜や松原や鯨を東京ドームや金銭的に換算すること自体、中央からのまなざしであるが、それをいわば流用し、力関係を逆転させている。もちろん、砂美人連の主張だけで大方町を代表させてしまうことは、大方町の内部にあるさまざまな力関係を捨象してしまう危険がともなう。
- (15) 「原生自然」概念や「マーケット論」にもとづいたエコ・ツーリズム論からは、たとえば鯨との関係のように、地域と密接には関係していなかったものを便宜的に取り込む砂浜美術館には、何の「自然性」もないといった反論が予想できる。
- (16) 高知新聞の投書欄には以下のような意見が寄せられている。「生まれ育ったわけではないが、父の郷里の大方町は、私にとってもふるさとだ。大方町で四年前、砂浜美術館がスタートした。設立でも開催でもない。この美術館のスタートとは、入野の砂浜の環境をミュージアムととらえる考え方の活動の開始だった。静かで力強い活動の存在で、自己紹介に幡多本籍を添える私の自慢の種が増えた。……都会人が、珍しいものを貴重がるのとはわけが違う。見慣れた風景を見つめ直して新しいものを生み出す、精神の産物だ」。

菊地：エコ・ツーリズムの分析視角に向けて

- (17) 紙面の関係で論じることができなかったが、砂浜美術館の実践は町内に十分に浸透しているわけではない。町内では、「砂浜美術館にお金（町からの補助金）をかけるのなら、自分たちの部落に道路や橋をつけてほしい」という意見が聞かれるが、それに対してモノづくりではなく考え方という論理だけでは説得性を持ち得ない。経済的效果に結びつく活動を展開していくことが大きな課題である。また、砂美人連のメンバーは、女性がいないなど比較的同質的な社会層に集中している。以上のような問題は、「私たちの町」という時の「私たち」とは誰なのか、砂美人連だけなのかという重要な問題を提起している。
- (18) エコツーリズム推進協議会設立シンポジウムで下村彰男は以下のように述べている。「ここにおられる皆さんの事例は、やはり自然の非日常性、自然のレベルが高いところのエコツーリズムの話で、日本の本来持っている自然の特徴とは、少し性格が違うと思うんです。……日本の自然と人間との関わりは、そうした生活に密着した所に特徴があると思います。そして、日本でエコツーリズムの展開を目指す時、そういう日常性の高い自然をどう取り込んでいくかということは非常に大きい問題ではないかと思うんです。……やはり地域の自主的な関わりが必要となるんですね。それは単に経済的に潤うかどうかという話だけでなく、地域の文化形成とか景観形成などに大きく関わってくるわけです」（エコツーリズム推進協議会, 1998:43）。また村井吉敬は、「地域共同体を基盤にした責任あるツーリズム」（Community Based Responsible Tourism）、「地域共同体を基盤にした持続可能なツーリズム」（Community Based Sustainable Tourism）、「人間ベースのツーリズム」（Humanity Based Tourism）といった概念が、インドネシアの現場で提唱されていると報告している（村井, 1998:105, 111）。これらの議論をエコ・ツーリズムと地域の持続的な発展という問題として考えるならば、当該地域住民が主体であることと当該地域の社会・文化構造と相対的に連続的であることが重要であるといえるだろう。
- (19) 筆者が1998年9月に西表島の浦内川でエコ・ツアーを体験した際、ガイドをされていた方は、新潟県と兵庫県の出身であった。また、エコツーリズム推進協議会に参加した際、移動中のバスの中で耳にした話だが、どのようにして地域に入りこみ、理解してもらうかが大きな問題のようであった。エコ・ツーリズムを導入するよそ者がいかに地域に住みついていくのかは重要なテーマであろう。
- (20) よそ者としてのエコ・ツーリストが、エコ・ツーリズムの体験を契機に、逆に対象地の人々が他の地域を訪れた経験を契機に、それぞれの「地元」をよそ者の視点から見直したり、自らのライフスタイルを問い直したりというように、当該地域住民＝地元、エコ・ツーリスト、研究者等＝よそ者という単純な図式は当てはまらない。

文献

- 荒山正彦, 1995, 「文化のオーセンティシティと国立公園の成立—観光現象を対象とした人文地理学研究的課題」『地理学評論』68-12:792-810.
- Boo, Elizabeth, 1991, "Planning for Ecotourism," *PARKS*, 2-3=1992, 薄木三生仮訳「エコ・ツーリズム計画」『国立公園』501:2-7.
- エコツーリズム推進協議会編, 1998, 『エコツーリズム推進協議会設立記念シンポジウム大会報告書』.
- 江口信清, 1998, 『観光と権力—カリブ海地域社会の観光現象』多賀出版.
- 福田珠己, 1996, 「赤瓦は何を語るか—沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動」『地理学評論』69-9:727-743.
- 橋本和也, 1999, 「楽園から環境へ」『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』世界思想社:265-289.
- 市川聡, 1995, 「屋久島におけるエコツアーの現状と課題」『国立公園』530:20-25.
- 池田光穂, 1996a, 「エコ・ツーリズムの思想」『天草海洋研究所研究報告』1:1-4.
- 池田光穂, 1996b, 「コスタリカのエコ・ツーリズム」山下晋司編『移動の民族誌』岩波書店:61-93.

- 伊藤秀三, 1992, 「ガラパゴス国立公園のエコ・ツーリズム」『国立公園』501:8-13.
- 伊藤太一, 1997, 「エコツーリズムのジレンマ」『森林科学』21:16-22.
- 嘉田由紀子, 1998, 「所有論からみた環境保全—資源および途上国開発問題への現代的意味」『環境社会学研究』4:107-124.
- 海津ゆりえ・橋本俊哉・真板昭夫, 1997, 「エコツーリズムの実践における資源管理システムの研究—西表島をケーススタディとして」『日本観光研究学会第12回全国大会論文集』:55-64.
- 菊地直樹, 1997, 「地域社会と環境問題—地域社会概念の再構成に向けた一試論」『人間と地域社会—21世紀への課題』学文社:252-272.
- 菊地直樹, 1998, 「地域振興としてのエコ・ツーリズム—高知県大方町砂浜美術館の事例から」『観光に関する学術研究論文—観光振興又は観光開発に対する提言—入選論文集』第3回:68-69.
- 菊地直樹, 1999a, 「砂浜美術館」鳥越皓之編『環境ボランティア・NPOの社会学』新曜社(近刊).
- 菊地直樹, 1999b, 「『地域づくり』の装置としてのエコ・ツーリズム—高知県大方町砂浜美術館の実践から」『観光研究』10-2(掲載決定).
- 鬼頭秀一, 1996, 『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』ちくま新書.
- 鬼頭秀一, 1998, 「環境運動/環境理念研究における『よそ者』論の射程—諫早湾と奄美大島の『自然の権利』訴訟の事例を中心に」『環境社会学研究』4:44-59.
- 特殊法人 国際観光振興会, 1992, 『国際観光情報』274.
- 国際ホエールウォッチング会議実行委員会, 1995, 『漁師が呼びかける-国際ホエールウォッチング会議報告書』.
- 熊本一規, 1995, 『持続的開発と生命系』学陽書房.
- 真板昭夫・海津ゆりえ, 1995, 「日本でエコツーリズムを成功させるには—地元を取り込んだ体制づくり」『グローバルネット』57:4-5.
- 真板昭夫・海津ゆりえ, 1996, 「エコツーリズムと旅行産業の課題—エコツーリズムを通じた持続可能な資源利用への道」『観光産業研究会レポート』2-4:21-49.
- 真板昭夫・宮川浩・内藤暢久・海津ゆりえ, 1998, 「参加者意識の分析からみた魅力あるエコツアープログラムに必要な要素についての研究」『日本観光研究学会第13回全国大会論文集』:119-128.
- 丸山康司, 1997, 「『自然保護再考』—青森県脇野沢村における『北限のサル』と『山猿』」『環境社会学研究』3:149-164.
- 松本敏郎, 1991=1994, 「人と自然との付き合い方を求めて—砂浜美術館構想」『大方町史』:472-479.
- 水野憲一, 1996, 「日本における保護区とエコツーリズム」『ワイルドライフ・フォーラム』2-3:53-56.
- 水野聖子, 1997, 「ホエールウォッチングを中心とした漁村におけるエコツーリズムの研究」東京水産大学修士論文.
- 宮内泰介, 1999, 「地域住民の視点との往復作業で“環境”を考える」『新環境学がわかる。』朝日新聞社:38-41.
- 森田真也, 1997, 「観光と『伝統文化』の意識化—沖縄県竹富島の事例から」『日本民俗学』209:33-65.
- 村井吉敬, 1998, 「地域自立をめざすエコ・ツーリズム」『サシとアジアと海世界』コモンズ:94-113.
- 中島成久, 1998, 『屋久島の環境民俗学—森の開発と神々の闘争』明石書店.
- 滑志田隆, 1995, 「白神山地の保全と利用—エコツーリズムの視点から」『産業と環境』3月号:52-57.
- 日米民間環境会議・日本側組織合同委員会, 1981, 『イリオモテヤマネコの保護と住民の生活基盤の確保』.
- 財団法人 日本交通公社調査部, 1994, 『観光読本』東洋経済新報社.
- 財団法人 日本自然保護協会, 1994, 『NACS-J エコツーリズム・ガイドライン』.
- 社団法人 日本旅行業協会, 1998, 『JATA エコツーリズムハンドブッカー—エコツーリズム実践のためのガイド』
- 西村幸子, 1998, 「エコツーリズム—持続可能な観光に向けての模索」『観光に関する学術研究論文—観光振

菊地：エコ・ツーリズムの分析視角に向けて

- 興又は観光開発に対する提言—入選論文集』第3回:37-54.
- 野田浩資, 1996, 「多面体としての専門家—地域環境問題のフィールドから」『ソシオロジ』41-2:91-96.
- 野田浩資, 1997, 「地域環境問題への社会的アプローチ—水環境と歴史的環境をめぐる」『琵琶湖研究所所報』15:48-53.
- 小田亮, 1996, 「ポストモダン人類学の代価—ブリコロールの戦術と生活の場の人類学」『国立民族学博物館研究報告』21-4:807-875.
- 太田好信, 1993, 「文化の客体化—観光をととした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57-4:383-410.
- 太田好信, 1996, 「エコロジー意識の観光人類学—ベリーズのエコ・ツーリズムを中心に」石森秀三編『観光の20世紀』ドメス出版:207-222.
- 砂美人連, 1992, 『砂美人連待夢子』5.
- 佐藤九穂江, 1993, 「日本におけるエコツーリズムの可能性—リゾート開発の反省から」『WWF』196:9-10.
- 関礼子, 1996, 「自然保護運動における『自然』—織田が浜埋立反対運動を通して」『社会学評論』47-4:461-475.
- 敷田麻実, 1994, 「エコツーリズムと日本の沿岸域におけるその可能性」『日本沿岸域会議論文集』6:1-15.
- Smith, Valenne L. ed., 1977 (1989), *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, Philadelphia: The University of Pennsylvania Press (1989, 2nd edition) =1991, 三村浩史監訳『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房.
- 砂浜美術館, 1997, 『砂浜美術館ノート—砂浜美術館の記録1989-1997』.
- 鳥越皓之, 1997, 『環境社会学の理論と実践—生活環境主義の立場から』有斐閣.
- 山極寿一, 1996, 「エコ・ツーリズムへ—自然との共生を求めて」山下晋司編『観光人類学』新曜社:197-205.
- 山下晋司, 1997, 「観光開発と地域的アイデンティティの創出—インドネシア・バリの事例から」『反開発の思想』岩波書店:107-124.
- 山下晋司編, 1996, 『観光人類学』新曜社.
- 吉兼秀夫, 1996, 「フィールドから学ぶ環境文化の重要性」『環境社会学研究』2:38-49.
- 吉兼秀夫, 1998, 「エコミュージアム活動の現状」『日本観光研究学会第13回全国大会論文集』:139-142.

付記

本稿は、環境社会学会第15回セミナー（1997年6月1日、於：松山大学）における報告をもとに、大幅に加筆・修正したものである。また財団法人アジア太平洋交流センター主催の第2回、第3回「観光に関する学術研究論文」で研究助成をいただいた。記して感謝します。

(きくち・なおき)

1999年3月1日受理、1999年5月28日掲載決定

TOWARD A PERSPECTIVE OF ENVIRONMENTAL SOCIOLOGY ON ECO-TOURISM: RECONSIDERING “INHABITANTS” AND “NATURE”

KIKUCHI Naoki

Institute of Natural and Environmental Sciences
HIMEJI INSTITUTE OF TECHNOLOGY
128 Shou-unji, Toyooka, Hyogo, 668-0814, JAPAN

Recently, the term “eco-tourism” is used as a key word for both sustainable tourism and nature conservation. The concept of eco-tourism relates to local people’s culture and life. Many studies argue that eco-tourism is a new type of tourism that can revitalize the local community, partly by stimulating local “environmental education” and “community participation.” But these studies do not always investigate the inhabitants’ own response as hosts of eco-tourism, based on their own culture and relationship to nature.

The purpose of this paper is to reconsider the social relationship between inhabitants and nature in eco-tourism. In response to eco-tourism, local people in Ogatacho, Kochi Prefecture, expressed their own concept of nature by establishing and maintaining the Sunahama Bijutsukan (literally, Sandy Beach Museum). In doing so, the local inhabitants utilized eco-tourism from outside to reconstruct and revitalize their own community and local identity.

To clarify this point, we must reconsider the concept of nature. Natural scientists have deemed eco-tourism important because it enables reconstructing nature into a socially meaningful good for consumption, thereby protecting it. For local inhabitants, however, ‘nature’ reveals natural features or special characteristics, culture, and histories of their own local community. Local inhabitants base their response to eco-tourism on this kind of local knowledge.

Keywords and phrases: eco-tourism, inhabitants, nature, protected area, Sunahama Bijutsukan, reconstruction of community

(Received March 1, 1999; Accepted May 28, 1999)